
雪うさぎは氷空を駆け巡り

テラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪つさぎは氷空を駆け巡り

【Nコード】

N1482Y

【作者名】

テラ

【あらすじ】

舞台はお決まり魔法や魔法生物の世界「アルヘイラ」。

主人公の「59」は記憶を無くし、雪原のなかひっそりと建てられた建物に監禁されていた、不思議な力を持つ、でもひ弱で優しい少女。彼女は自分の過去を手に入れるため、猛吹雪の中建物を飛び出すが...

プロローグ（前書き）

silver break のイリアス君の影響で機械音痴はパソコンをいじってみました。ガキンチョの駄作ですが小さじ一杯分のヒマと広い心のある人は見てみてください。

プロローグ

冬の寒さが訪れた森に、真っ白で軽いものがふわふわと降りてきた。

「・・・雪だ。」

私と、あの子の大好きな天気。後で、みんなをここに呼んで遊ぼうかな。早く、積もるといいな。雪が積もるまでは私はここで歌でも歌っていようか。私とみんなの大好きだったあの歌を・・・。

悲しいときは空を見てご覧 空に白い華が咲いたのがわかるでしょ？

触ったら溶けてしまったけど消えた訳じゃない まだそこに在るの

「だから悲しまないで 私もたとえ見えなくなっても消えたわけじゃない 私は・・・」

一陣の強い風が、歌声をのせてはるか遠くの地まで走り去って行った。

逃げ出したモルモット

「はあ．．．はあ．．．」

肩で荒く息をしながら石づくりの壁にもたれかかる。もう、だいぶ遠くまで来たけど、まだ追ってきているかもしれない。もっと、遠くまで．．．

「いましたか!？」

「．．．っ!？」

私は嫌と言う程聞きなれたその声の主から自分の姿を隠そうと、必死で細い壁の隙間に体を押し込んだ。

まさか、もうこんなところまで追って来ていたなんて!

(お願い、こないで．．．)

「神」というものを信じた事は無かったけれど、必死に手をあわせて「何か」に祈った。今捕まれば、またあの忌まわしき場所に連れ戻されてしまう。それだけは、避けたかった。

「早く捕まえないと実験が．．．!」

「待て。」

(この声は．．．!)

忘れもしない、いや、忘れられるはずもないこの声。みんなを、次々と消していった男の、感情を感じさせない冷たい声。何もされていないのに、ただ声を聞いただけで身動きが取れなくなってしまふような、そんな声に自然に体がカタカタと震えてくる。

「アレの性質を、直接の管理者のお前が知らない訳がなからう。この空では、吹雪が来る。こっちが死ぬ前に、早くもどるぞ。」

「しかし．．．!」

「二度も言わせる気が。」

「．．．っ!．．．はい。」

ざく、ざく、ざく．．．

雪を踏む、重たい音が遠ざかったのを確認して、私は隙間から這い

出て、雪の上へあたりこんだ。

少女が、ふと目に入った雪の塊を片手に取り、顔の高さまで引き上げると、それは宙に浮き、クルクルとまわってから粉々に砕け散った。それは、自然に起きた現象ではなく、少女がその手で、意図的に行なったことだった。それを行なった少女の顔は笑っているのに、悲しげでもある。少女は、どんな寒さであつても、凍死することはない。そして、氷や水を自由に操れる。それが、彼女の力であり、そして彼女を絶望に陥れるものでもあつた。

「私って．．．何なんだろう．．．。」
ひとり呟いて、少女は少しよるめきながら立ち上がった。その時には、先程まで悲しげに歪んでいた彼女の綺麗なライトブルーの目は、決意に満ちていた。

「もう、いかなくちや。」

その言葉を、弱気になっている自分に向かって強く、強く言い放ち、少女は激しく吹き荒れる吹雪の中に飛び出していった。

私は何者なのか。その答えはまだ見つからない。
ない。

私自身の手で、これからそれを見つけていかなければ．．．。

逃げ出したモルモット（後書き）

見ていって下さってくださってありがとうございます、感謝感激雨霰です。

??? (前書き)

まだうまく文の整理出来てないんですけど、気にしないで下さいね。

???

少女が姿を消した後。彼女の逃げ出した建物の一室で、数人の人間による話し合いが行われていた。

「何故“59”を捕まえずにおめおめと戻ってきた!? アレは、唯一の成功品だぞ!」

最高級のワインを美しい絨毯にぶちまけ、近くにあった高価な壺を割つてもなお騒ぎ続ける太った男に、赤い髪の方は一瞬だけ軽蔑の眼差しを向けた。

(これしきの事で取り乱すなど、自らの愚かさを証明している様なものだ。愚か者は愚か者らしく、そこで赤子の様に騒ぎ立てて入れば良い。)

そんなことを思われているとは微塵も考えもせずにもまた怒鳴り散らす男にうんざりしながらも、それでも下の者としての礼儀とやらをやっているように見せてやる。

「申し訳ございません。吹雪に見舞われてしまい、奴の姿が紛れてしまったのです。しかし...」

その声は、ただ聴くだけで震えてしまうような、静かで恐ろしい、しかし美しいもので、少女を何よりも怯えさせたあの声だった。声の主がにたありと笑うと、彼の顔は墮落した天使の顔に見える。

その様子が磨きあげられた鏡に映し出され、赤い髪が炎で揺らめく様には、太った男も思わず黙ってしまう様な恐ろしさがあった。

「アレは、何としても“回収”して参ります。」

言い切るその声は、確信に満ち溢れていたのが、そこに居た人間にはすぐ見てとれた。

「そこまで言い切る自信は、どこから来ているのでしょうかね、アカツキ?」

半分呆れた様に問う女の声に、彼は笑って答えた。

「私は、今までに与えられた任務は全て遂行した。そして、それはこれからも変わらない。その事は、お前が一番わかっているのだから?。」

「そうかも知れないわね。でも、今はそんな事どうでもいいわ。あなたは早くアレを捕獲してきて。」

「言われなくともそうするぞ。」

部屋の外で暴れる風が、こころなしか強くなったよ
うな、そんな気がした。

??? (後書き)

誰ですかね、この男の人。私がつりあえずこの人で連想するのは、
クラスにひとりはずいいる、「私」リッチ&天才」的なひとたち。

ああ愛しの君。プレゼントはカッターナイフ？それとも釘を一本サ
ービスで刺した藁人形？

．．．え？包丁がいいって？ダメですよ、うちのは刃が研げてなく
て林檎の皮でさえむきにくいんですから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1482y/>

雪うさぎは氷空を駆け巡り

2011年11月9日01時04分発行